【令和元年度実績】

1. 医薬品開発研究体制の構築

No.24 ②-3 トランスレーショナルリサーチの促進
No.27 ①-2 世界をリードする優れた研究者等の確保

計画

医薬品開発研究センターを平成 31 年 4 月に開設し、部局間連携、産学連携を推進する体制を構築する。本センターでは、主要テーマごとに分野横断的な研究体制をとれるような体制としている。さらに、本センターに専任の教員を配置して分野横断的な研究を推進するとともに、クロスアポイントメント制度等を利用して外部の研究者を雇用、研究の活性化を図る足場とする。また、共同研究場所として薬学研究科ラジオアイソトープ研究教育センターの廃止を決定し、本年度中に除染、廃止作業を進め、来年度以降医薬品開発研究センターとして、共同研究の拠点として活用する予定である。また、薬学研究科が有するシーズ集および主要テーマごとの窓口担当者をホームページ上で公開し、さらにシンポジウムやセミナーを開催して、他部局、企業との連携を促進するとともに、本センターの活動の周知に努める。

実績報告

2019 年 4 月より医薬品開発研究センターを発足した。本センターは、分野横断的な創薬研究を推進するとともに、医薬品の開発と適正使用に向け、他部局・他大学、産業界、職能団体等との連携を強化するための拠点とするものである。本センターには創薬理論創成部門、創薬企画推進部門、連携企画推進部門、研究開発支援部門の4部門を設置した。創薬理論創成部門はさらに革新的創薬グループおよび層別化創薬グループ、創薬企画推進部門は脳作動薬グループ、免疫制御グループ、腎・代謝ストレスグループに分かれ、個々の専門性・研究業績を元に、分野を超えて連携して創薬を推進する体制を構築した（図1）。さらに 2020 年度 4 月には COVID-19 対策研究グループを新たに結成し、4つのグループの創薬連携体制を構築している(図2)。2019 年 10 月にはクロスアポイントメント制により国立研究開発法人 理化学研究所の女性研究者を教授として迎え、また東北大学発のベンチャー ブレインイノベーションを立ち上げた当研究科講師をセンターの准教授として配置し、創薬研究の充実を図った。すでに、製薬会社1、ベンチャー企業3から創薬支援に関する相談を受けている。

薬学研究科附属医薬品開発研究センター組織図

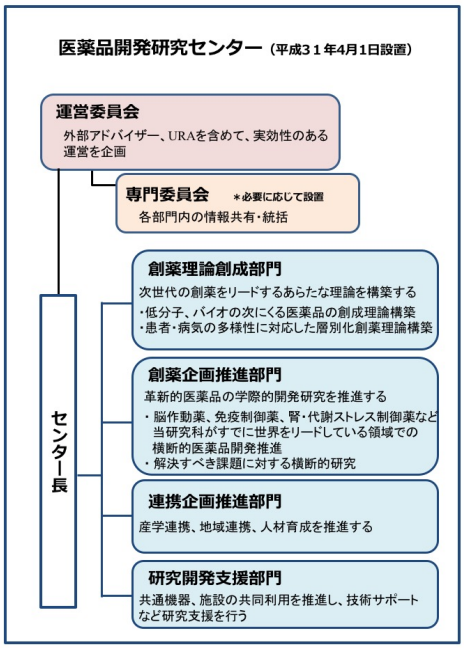

図1 センター組織図

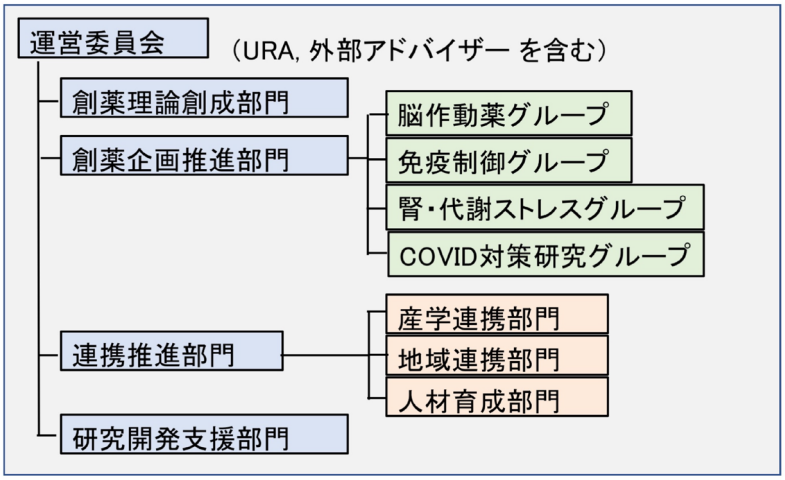

図2 医薬品開発研究センター 研究グループ

11 月 15 日には、両博士に加え、国立医薬品食品衛生研究所の内藤幹彦博士をお迎えして、キックオフシンポジウムを開催し、他部局等への周知を図った（図3）。1 月 16 日には、AI を活用した創薬についての講演会（図4）を開催した。また 3 月 12 日には、創薬企画推進部門 腎・代謝ストレスグループが主催となり、医学系研究科未来型医療創成センター等との共催によるセミナー「酸化ストレスと創薬」を 3 月 12 日に開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期して開催した（図5）。（令和2年7月 28 日にオンラインシンポジウムとして開催し、約 120 名の参加があった。）

図3　キックオフシンポジウム

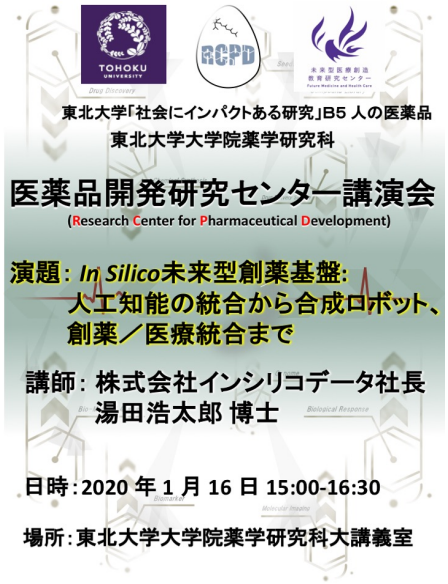

図4　AI と創薬　講演会の開催

図5　INGEM との共催シンポジウム

本センターのホームページを開設し、薬学研究科の研究シーズを公開するとともに、セミナーの開催や、産学連携の公募情報、連携窓口等を提供している（http://www.pharm.tohoku.ac.jp/research_center/）(図6)。

図6　医薬品開発研究センター HP

東北大学化合物ライブラリーの充実化とその提供、及びヒット化合物の構造展開も行った。医学系研究科、農学研究科、生命科学研究科と連携し、東北大学化合物ライブラリーは 7,600 化合物に拡充し、学外2件を含む計5件の新規研究課題に対し化合物を提供した。また 14 課題に対して構造最適化を行い、協同して創薬シーズの探索研究を実施した。医薬品開発研究センターは、東北大学化合物の保管、管理、並びに スクリーニング支援を行う場として、さらに産学連携

の共同研究の場として、薬学研究科ラジオアイソトープ研究教育センターを使用するため、総長裁量経費の支援を受けて、汚染検査、廃止手続きを進め、令和元年度3月その手続きが完了した。

図1　センター組織図.jpeg, 図1b センター組織図研究グループ.jpeg, 図 2a　医薬品開発研究センター　キックオフシンポジウム..jpeg, 図2b　RCPD シンポジウムポスター.jpeg, 図 2c　RCPD 講演会　AI に関する講演会.jpeg, 図3　医薬品開発研究センター　HP.jpg

---

2. グローバルネットワークの構築と推進

No.42 ①-3 グローバルネットワークの形成・展開

計画

大学間・部局間協定校である成均館大学、忠北大学と国際交流シンポジウムを、本年度は東北大学にて開催する予定である。英国イーストアングリア大学(UEA)とは昨年末に部局間協定に加えて大学間協定を締結したが、今年の 12 月には、法学研究科、医学系研究科とともにジョイントシンポジウムの開催を計画している。四川大学薬学部とは、大学間協定にもとづき、さらに部局間同士での交流を深めるため国際シンポジウム（四川大学薬学部にて、5 月）を行う。さらに 9 月には東北大学において国際シンポジウムを開催するとともに、大学院生数名の短期・中期滞在による研究交流を計画している。さらに、JST の日本・アジア青少年サイエンス交流事業に採択され、中国薬科大学から教員 2 名、大学院生 6 名を1週間受け入れ、研究室での交流、東北メディカル・メガバンク機構の見学などを企画するとともに、今後の連携を模索する。台北医学大学とは学部生の交換留学を継続しているが、さらに研究上のジョイントシンポジウムを昨年度より開始している。今年度は台北で行うことを計画しており、本学からは 3 名派遣することにしている。これらにより、海外の大学との新たなネットワークを構築、連携強化を推進する。

実績報告

大学間、あるいは部局間協定のある海外の大学との合同国際シンポジウムを以下のように開催し、グローバルな交流、連携を推進した。

四川大学(中国)とは、5 月 4 日に四川にて第 1 回合同シンポジウムを開催し、当研究科から 5 名の教員が参加した(図1)。さらに 9 月 24,25 日には第 2 回合同シンポジウムを本研究科で開催した（図2）。四川大学より6名の教員と 8 名の大学院生が来日し、シンポジウムにて発表、さらに、大学院学生たちはその後約1週間当研究科の各研究室に滞在して、研究・交流を図った。

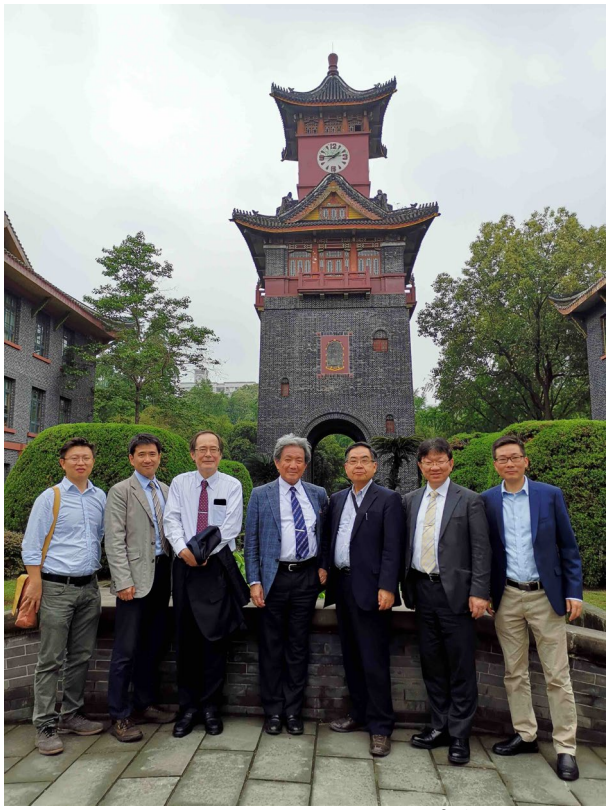

図1　四川大学（中国）での国際シンポジウム

図2　薬学研究科での　四川大学との国際シンポジウム

成均館大学、忠北大学（韓国）との部局間協定に基づき、日韓国際シンポジウムを薬学研究科において、2019 年 11 月 29 日に行った（図3）。成均館大学より3名、忠北大学から3名の講演者を招聘した。

台北医学大学との部局間協定に基づき、学部学生2名が台北学大学に約2週間留学（添付資料1　台北医学大学での 2019 Summer school　日程.pdf）し、さらに台北医学大学の学生2名を約1ヶ月受け入れ、学生間の交流を継続した。今年度は下記の中国薬科大学からの学生ととも

に、東北メディカルメガバンク機構を訪問し(図4)、この様子は当機構の HP に掲載されている（https://www.megabank.tohoku.ac.jp/news/35024）。この学生間の交流については、11 月 9 日の東北大学・北海道大学海外留学合同報告会を開催し、交流内容について情報交換した。さらに、北海道大学、九州大学、長崎大学、台北医学大学、陽明大学との合同国際シンポジウムを台北医学大学 2019 年 8 月 30 日に台北にて行なった（図5）。薬学研究科からは 3 人の教員が参加して講演を行うとともに、今後の連携について議論した。

図3　日韓国際シンポジウム

図4　東北メディカル・メガバンクの訪問

図5　台北医学大学での国際シンポジウム

イーストアングリア大学との大学間協定に基づき、 The Second Tohoku Conference on Global Japanese Studies を法学研究科・医学系研究科との文理融合シンポジウムとして 2019 年 12 月 14,15 日に開催され、薬学研究科からも2名の教員がシンポジストとして参画した。さらに、知のフォーラム Tohoku University Thematic Forum for Creativity 「Cancer - from Biology to Acceptance -」の企画・運営にも寄与し、多くの大学院生が発表した。

このほか、JST の日本・アジア青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンス交流事業」により、中国薬科大学の教員2名、6名の大学院生を招へいし、「未来型医療と創薬を目指した日中交流」を目的とした交流を 2019 年 8 月 22 日より 8 月 28 日までの7日間実施した(図 6)。その状況については上記 JST の本プログラムの HP に活動レポートとして掲載されている（https://ssp.jst.go.jp/report2019/k_vol048.html）。

図6　中国薬科大学との交流（さくらサイエンス）

以上のようにグローバルネットワークの形成、発展を積極的に進め、教員間の連携を深めるとともに、大学院生の英語での発表・交流の機会を増加させ、グローバルな感覚を育成した。

図1　四川大学（中国）での国際シンポジウム.jpg, 図2　薬学研究科での 四川大学との国際シンポジウム.jpg, 図3　日韓国際シンポジウム.jpeg, 図4　東北メディカル・メガバンクの訪問.jpg, 図5　台北医学大学での国際シンポジウム.jpg, 図6　中国薬科大学との交流（さくらサイエンス）.jpg, 添付資料1　台北医学大学での 2019 Summer school　日程.pdf

---

3. 優れた若手、女性・外国人研究者の積極的登用による医薬品開発研究の推進

No.28　①-3　優れた若手・女性・外国人研究者の積極的登用

計画

優れた若手、女性・外国人研究者を積極的登用することを目的として、医薬品開発研究センターをその活動場所として提供する。すでに、専任の若手教員を配置し、任期制とすることにより若手研究者の雇用を促進する。さらにクロスアポイントメント制度により、最先端で活躍する研究者を受け入れ、創薬研究を推進する体制を構築することを計画している。現在、本制度により女性研究者を教授として受け入れる予定である。また、グアテマラからの女性留学生（現在本学博士課程在籍中）は博士取得後助教として雇用する予定となっている（10 月 1 日予定）。また昨年度に引き続き、女性機能有機分子創生チーム ORCHID の創薬研究活動も推進する。

実績報告

医薬品開発研究センターを拠点として優れた若手、女性・外国人研究者の積極的登用を推進した。まず、医薬品開発研究センターに任期制助教枠を4つ設置し、若手の雇用を積極的に推進することとした。また、ベンチャー企業「ブレインイノベーション」を設立した本研究科の講師を、本医

薬品開発研究センターの准教授として配置(11 月 1 日)し、さらに会社の人員を研究員として受け入れてその活動を支援している。

クロスアポイントメント制度により理化学研究所の女性研究者を、医薬品開発研究センターの教授として迎えた(10 月 1 日)。当人は星薬科大学に異動後もクロスアポイントメントを継続して、薬学研究に貢献し、令和2年度理化学研究所・星薬科大学・東北大学薬学研究科シンポジウム(エンジニアリングネットワーク・ワークショップ)を開催予定である(図1)。

女性の助教が、准教授に令和元年度に1名、令和2年度に1名昇任し、現在、薬学研究科准教授・講師　計 19 名のうち女性は5名(26.3%)とした。

本学の博士課程を修了し、博士(薬科学)を取得(2019 年 9 月)した外国人女性研究者を引き続き、外国人雇用促進経費を活用して助教として雇用した(10 月1日より)。研究をさらに推進するとともに、「薬学英語」の講義を担当し、英語教育にも貢献している。2020 年度 4 月からは、若手女性・若手外国人特別教員制度を活用して雇用を継続し、AMED の令和2年度 Intersteller Initiative にも採択され、研究教育に活躍している。薬学研究科の HP にも掲載し、外国人若手女性教員の活躍を支援している(添付資料1　Intersteller Initiative に採択.pdf)。

女性有機合成研究者グループ ORCHID も活発に活動し、12 月 7 日には第 3 回女性研究者シンポジウムを開催(参加者 85 名)した(図2)。さらに、5題の共同研究発表、55 化合物の合成、提供するなど、女性による研究を奨励した。その活動を薬学研究科として高く評価し、令和2年度の薬学研究科長賞を授与した。

このように研究科として女性研究者の活躍を支援し、その増加を図っている。その効果として、令和2年度博士課程後期 3 年の課程への進学者 17 人中 4 人が女性(23.5%) であり、2年次および3年次の女性の割合それぞれ 0%、13.3%に比べて大きく増加した。また、薬学履修課程(4年制)においても、令和2年度入学者4人中 1 人が女性(25%)であり、2−4年次の合計5名(うち女性 1 名(20%))に比べて、入学者数および女性の割合は増大した。

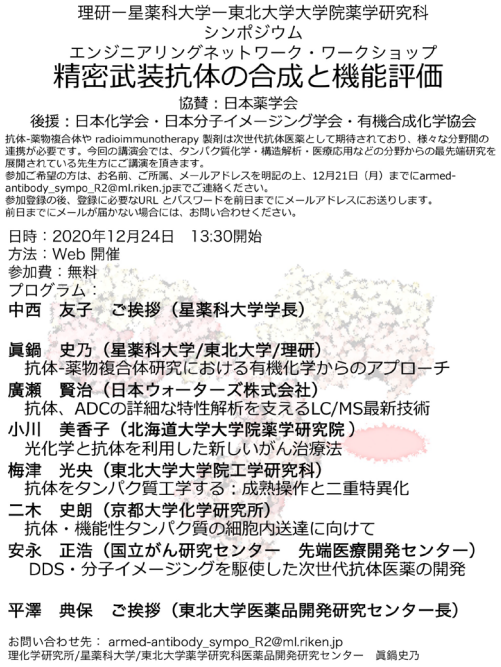
理研ー星薬科大学ー東北大学大学院薬学研究科
シンポジウム
エンジニアリングネットワーク・ワークショップ
精密武装抗体の合成と機能評価
協賛：日本薬学会
後援：日本化学会・日本分子イメージング学会・有機合成化学協会
抗体-薬物複合体や radioimmunotherapy 製剤は次世代抗体医薬として期待されており、様々な分野間の連携が必要です。今回の講演会では、タンパク質化学・構造解析・医療応用などの分野からの最先端研究を展開されている先生方にご講演を頂きます。
参加ご希望の方は、お名前、ご所属、メールアドレスを明記の上、12月21日（月）までにarmed-antibody_sympo_R2@ml.riken.jpまでご連絡ください。
参加登録の後、登録に必要なURL とパスワードを前日までにメールアドレスにお送りします。
前日までにメールが届かない場合には、お問い合わせください。
日時：2020年12月24日　13:30開始
方法：Web 開催
参加費：無料
プログラム：
中西　友子　ご挨拶（星薬科大学学長）
眞鍋　史乃（星薬科大学/東北大学/理研）
抗体-薬物複合体研究における有機化学からのアプローチ
廣瀬　賢治（日本ウォーターズ株式会社）
抗体、ADCの詳細な特性解析を支えるLC/MS最新技術
小川　美香子（北海道大学大学院薬学研究院）
光化学と抗体を利用した新しいがん治療法
梅津　光央（東北大学大学院工学研究科）
抗体をタンパク質工学する：成熟操作と二重特異化
二木　史朗（京都大学化学研究所）
抗体・機能性タンパク質の細胞内送達に向けて
安永　正浩（国立がん研究センター　先端医療開発センター）
DDS・分子イメージングを駆使した次世代抗体医薬の開発
平澤　典保　ご挨拶（東北大学医薬品開発研究センター長）
お問い合わせ先： armed-antibody_sympo_R2@ml.riken.jp
理化学研究所/星薬科大学/東北大学薬学研究科医薬品開発研究センター　眞鍋史乃

図1　理化学研究所・星薬科大学・東北大学薬学研究科シンポジウム

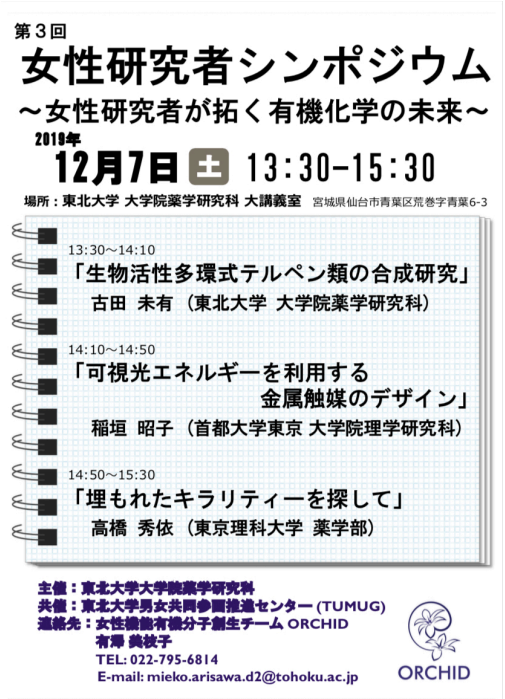
第３回
女性研究者シンポジウム
～女性研究者が拓く有機化学の未来～
2019年
12月7日 土 13:30-15:30
場所：東北大学 大学院薬学研究科 大講義室 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
13:30～14:10
「生物活性多環式テルペン類の合成研究」
古田 未有（東北大学 大学院薬学研究科）
14:10～14:50
「可視光エネルギーを利用する
金属触媒のデザイン」
稲垣 昭子（首都大学東京 大学院理学研究科）
14:50～15:30
「埋もれたキラリティーを探して」
高橋 秀依（東京理科大学 薬学部）
主催：東北大学大学院薬学研究科
共催：東北大学男女共同参画推進センター（TUMUG）
連絡先：女性機能有機分子創生チーム ORCHID
有澤 美枝子
TEL: 022-795-6814
E-mail: mieko.arisawa.d2@tohoku.ac.jp
ORCHID

図2　第3回女性研究者シンポジウム

図1　第3回エンジニアリングネットワークポスター.jpg, 図2　女性研究者シンポジウムポスター.jpg, 添付資料1　Intersteller Initiative に採択.pdf

---

4. 先導的地域薬剤師の育成および学び直し支援

No.04 ②-3 高度教養教育と専門教育との有機的連携

計画

地域医療における先進医療を推進するためには薬局薬剤師の実践的な教育（学部・大学院教育ならびに薬剤師学び直し教育）、研究体制の構築が必要である。これまで、大学病院との連携による先導的薬剤師育成プログラムを構築し、ファーマコゲノミクス・ファーマコメタボロミクスに関する研究・教育を推進してきたが、さらに未来型医療創成センターとの連携により、これらの基礎技術をさらに社会実装に向けて進展させる。また、地域薬局薬剤師の高度教育を実施するため本年度 4 月より、社会薬学マネジメント寄附講座を開設した。実務経験を有し、宮城県薬剤師会副会長（本学出身者）を客員准教授として迎え、薬局を足場とした研究、地域医療における薬剤師の役割についての研究、教育体制の整備を進め、セミナー・研究成果発表等を開催する。

実績報告

スーパージェネラリスト・ファーマシスト・プラス育成事業（機能強化）において、ゲノムならびにバイオマーカー解析をもとに個別化医療を実践することができる先導的薬剤師の育成を推進した。本プロジェクトでは、東北メディカル・メガバンク機構ならびに未来型医療創成センターとも連携し、特に薬物代謝に関わる遺伝子変異に関して共同研究を進めるとともに、遺伝情報等回付に関わる検討にも参画した。この研究成果は 2020 年に一流国際誌に受理され、東北メディカル・メガバンク機構及び未来型医療創成センターのホームページにも研究成果として掲載された(添付文書１ 共同研究1.pdf、添付文書２ 共同研究2.pdf)。

地域薬剤師育成、学び直しを支援するための研修会・セミナーを、2019 年 8 月 26 日に第 1 回地域薬剤師研修会、8 月 28 日に宮城県石巻地区被災地医療研修会(図1、添付文書3 宮城県石巻地区被災地医療研修会.pdf)を開催した。これらには約 30 名の参加があった。2019 年4月より、社会薬学マネジメント寄付講座を開設し（図2）、宮城県薬剤師会との連携による地域薬剤師の課題解決向けた活動を開始した。本年度は、10 月 25 日には宮城県庁との連携により宮城県における薬剤師の確保、および地域偏在解消事業についてのセミナーを実施した（参加者約 20 名）。

図1 宮城県石巻地区被災地医療研修会

社会薬学マネジメント寄附講座の概要

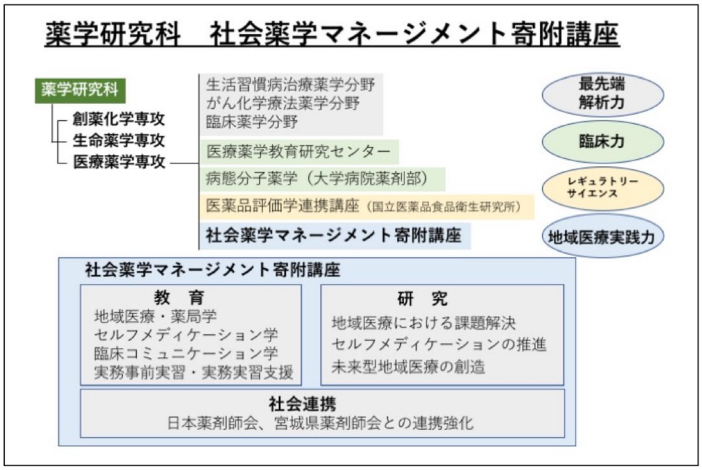

図2　社会薬学マネジメント寄附講座の開設

薬剤師の学び直しを支援するための薬剤師認定制度認証機構により認められている Master of Clinical Science コース(MCS コース)を継続して実施し、今年度は 16 回の講義を実施し、薬局薬剤師のべ 81 名、病院薬剤師のべ 43 名の参加があった。東北大学病院薬剤師にアンケート行った結果、回答者 10 名のうち、5 回以上 MCS コースの会議に出席したものが 60%、そのうち 66.7%が、本コースが臨床研究、臨床試験などの業務に役に立ったと回答した。宮城県薬剤師会、宮城県病院薬剤師会との共催とし、それぞれの研修認定シールを交付して、地域薬剤師の生涯教育にも貢献した。

図 2b　女川町地域医療センター.JPG, 添付文書1　共同研究1.pdf, 添付文書2　共同研究2.pdf, 添付文書3　宮城県石巻地区被災地医療研修会.pdf, 社会薬学マネジメント寄付講座.jpeg

---

5. 被災地域の健康サポート

No.38 ①-2 復興に長期を要する被災地域への貢献
No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

計画

環境省「放射線健康管理・健康不安対策事業（放射線の健康影響に係る研究調査事業）に採択（平成 31 年度–令和3年度）され、原子力発電所周囲地域の現存被ばく状況における住民の被ばく線量評価を実施し、住民の健康不安に対する科学的なサポートを実施する。また、現在、仙台都市部に比して、被災沿岸部では肥満傾向が見られている。その改善には地域薬剤師による健康サポートが必要と考えられるが、現在の活動状況を調査し、さらに宮城県のメタボ対策事業の地域薬剤師による住民への啓蒙のあり方を調査・研究することにより、被災地域の住民の健康サポートを実施する。

実績報告

被災地域のサポートとして、東京電力福島第一原子力発電所事故による住民の被ばく線量及び住家の放射線測定を継続している。特に令和元年度は、環境省「放射線健康管理・健康不安対策事業（放射線の健康影響に係る研究調査事業）として、「住家ない汚染の包括的研究及びこれによる内部被ばく線量評価」を実施し、避難指示区域の解除及び特定復興再生拠点区域の今

後の解除を控え、帰還・今日中する住民の増加が予測されるなか、より適切に被ばく線量の推定を行えるように、現状に即した係数を取得することを目的として、(1)住民が最も長い時間を過ごす住家屋内の放射線量の推定のために、現状に見合った線量限数計数を算出するための測定、並びに (2) 屋内残留放射能（表面汚染密度）の時間計画、並びに期間後の住家での変化、について、現場での住民の被ばく線量及び住家の放射線測定を継続している。

2019 年 4 月に社会薬学マネジメント寄附講座を開設し、宮城県庁、宮城県薬剤師会、仙台市薬剤師会、石巻薬剤師会との連携を元に、仙台市、並びに石巻地区において研修会を実施する（図1）とともに、健康サポート薬局の薬剤師および患者のメタボ防止に関する認識を調査した。この調査から、健康サポートならびにメタボ防止のための政策活動に、薬剤師が積極的に関与していく必要性を提案するなど、行政・職能団体と協力して被災地域の住民の健康サポートを推進するための活動を開始した。

図1　宮城県・石巻薬剤師会との石巻研修会

図1　宮城県・石巻薬剤師会との石巻研修会.jpg

6. 統合機能創成分子科学卓越大学院構想

No.03 ②-2 大学院教育の充実

実績報告

東北大学化学系部局の卓越した有機化学の研究教育基盤（巨大・複雑分子の精密合成化学）とデータ科学を融合させて、既存のデータベースには存在しない、「信頼できるネガテータ」を学習させた化学インテリジェンスと、その発展と応用を支える周辺技術（化学 IoT、合成ロボット）の開発を機軸とした教育プログラムを産学連携で実施するための卓越大学院「統合機能創成分子科学卓越大学院」を薬学研究科が主体となって構想し（図1）、申請した。

本卓越大学院は、化学系学内 10 部局（薬学研究科、理学研究科、工学研究科、環境科学研究科、農学研究科、生命科学研究科、多元物質科学研究科、情報科学研究科、オープンイノベーション機構、データ駆動科学・AI 教育研究センター）、海外連携機関　5 大学（Case Western

Reserve Univ.（アメリカ）、Univ. of East Anglia（イギリス）、Technical Univ. Dortmund（ドイツ）、Univ. of Bordeaux（フランス）、四川大学（中国））、20 の連携企業（アステラス製薬、協和キリン、塩野義製薬、中外製薬、田辺三菱製薬、カネカ、住友化学、高砂香料工業、東レ、日産化学、富士フィルム、三菱ケミカル、ブレインイノベーション、東京大学エッジキャピタル、東北大学ベンチャーパートナーズ、インシリコデータ、SMBC 日興証券、名古屋国際特許事務所、尾田・星野法律事務所、野村證券）の連携によるものである。

本プログラムにより、自然現象の深層を化学的に理解し、社会のニーズを読み解き、未来産業に活用・展開できる高度な発想力、研究能力、知財開発力、そして挑戦的精神をもった知のプロフェッショナル（化学博士人材）の育成を目指している。本大学院は分子複雑系に強みをもつ化学インテリジェンスを活用するコンソーシアムの形成を促す貴重な知財となる。その活用と維持のための経費を得て、プログラムを継続・発展させることを本申請で提案した（図2）。

残念ながら採択されるには至らなかったが、薬学研究科の強みである化学系が中心となり、東北大学の産学官連携をさらに発展させるための重要な第一歩となった。

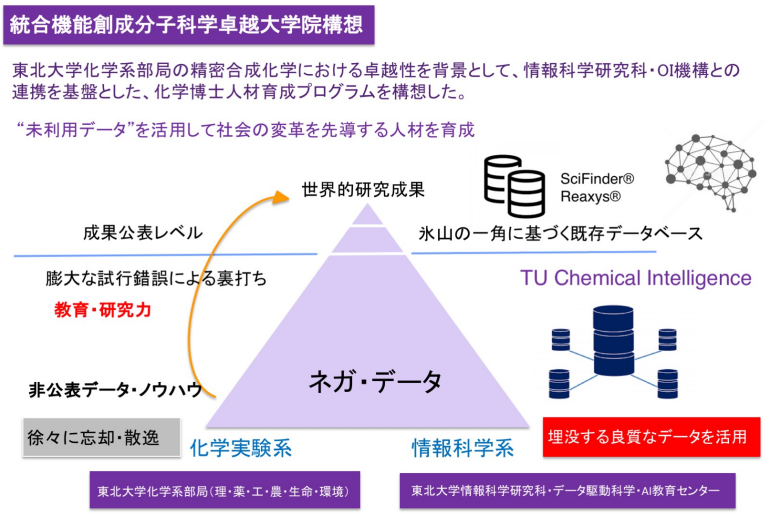

図1　統合機能創成分子科学卓越大学院構想

図2　プログラムを継続的に発展させるための産学官連携ネットワーク

スライド 1.jpeg, スライド 2.jpeg

7. 若手教員の育成

No.25 ③-1 新たな研究フロンティアの開拓
No.20 ①-2 世界トップレベル研究の推進

実績報告

薬学研究科では、領域の異なる若手教員を同一の海外の学会に派遣し、親睦を高めるとともに、分野横断的な研究・連携を推進する「若手研究者海外派遣プログラム」を平成 30 年度よりスタートしている。2年目の令和元年度には、「酸化ストレス」をキーワードに、4名の助教を海外学会（ゴードン会議 2020 年2月）に派遣し、この領域のトップクラスの研究者との交流を持った。その成果を第 2 回医薬品開発研究センターシンポジウムにおいて報告し、大学院生等へのメッセージとした。分野横断的な研究だけでなく、ゴードン会議では著名な研究者が多く参加しており、国際共同研究のきっかけをつくる良い機会になったことも報告された。実際、帰国後、本会議参加者との共同研究がスタート、あるいは発展したものは、海外研究者と4件、日本人研究者と2件となっている。

8. 第3者機構による薬学教育評価

No.11 ①-4 教育の質の向上方策の推進

実績報告

2018 年度（平成 30 年度）-2019 年度（令和元年度）に、薬学科における薬学教育の内容、体系性について自己点検報告書を作成し、2019 年度（令和元年度）に薬学教育評価機構により第3者による薬学教育に関する外部評価を受けた。書類による審査とともに、訪問調査が実施され、その結果として東北大学薬学部薬学科（6年制薬学教育プログラム）は、2018 年度（平成 28 年度）-2019 年度（令和元年度）には、薬学科における薬学教育の内容、体系性について自己点

検し、2019 年度（令和元年度）には薬学教育評価機構により第3者機関による外部評価を受けた。その結果、東北大学薬学部は、「薬を通じて人類の福祉と発展に貢献できる人材を育成する」という薬学部・薬学研究科の教育理念に基づいて、「研究心あふれる高度薬剤師としての基盤形成を行うこと」を目的とする6年制薬学教育を行っている」と評価され、薬学教育評価機構が定める「薬学教育評価　評価基準」に適合していると認定された。いくつかの指摘事項については令和2年度において検討し、改善を進めている。このように薬学教育に関して PDCA サイクルを回して改善に取り組んでいる。